

△▼ 国内研究報告 ▼△

名古屋大学のセミナーに参加して

細田 由利

私は2021年度に国内研究をする機会をいただいて名古屋大学で客員研究員として研究を進めています。とは言っても、国際日本学部が新設されたばかりということもあり、前期2コマ、後期3コマ神奈川大学で学部の授業を受け持ち、大学院生の博士論文の指導も行っているため、週に3～4回はMMキャンパスに行っている状態です。そのため、以前に取らせていただいた在外研究のように研究に専念する生活は送っていませんが、それでも通常よりは研究に従事する時間をいただいています。在外研究を取られた方ほど目新しい出来事はないのですが、それでも名古屋大学で開講されている会話分析のセミナーや研究会に定期的に参加させていただく中で気づいたことがいくつかありますので、このNews Letterでご報告させていただきますと思います。

まず、名古屋大学の教員や大学院生の方々の研究に対する熱意に圧倒されています。教員の方々、大学院でもう必要単位を取り終えた方々はセミナーや研究会に出席することは必須ではないにもかかわらず、毎回多くの会話分析の研究に従事している教員、大学院生、卒業生が出席され、その回に提供された相互行為のデータに関する議論が

盛んに行われています。毎回違う参加者がデータを提供してそれについて意見を出し合うのですが、自分自身のデータでないにもかかわらず、参加者たちはあたかも自分のデータであるかのように思い入れをもってデータ観察をし、自らの解釈を述べています。私も前期に1回データを提供させていただきましたが、みなさんにデータを観察していただくことで、今後の研究に役立つ多くの気づきがありました。11月にも違うデータを提供させていただくことになっていますので、またどんな新しい発見があるか楽しみにしています。特に今回は現在書き始めている論文の軸となるデータを提供しようと思っているので、専門家のみなさんに繰り返し観察していただいたの解釈をお伺いし、そこで見られる現象を精緻化していくのが待ち遠しいです。

次に名古屋大学の大学院に所属する中国人留学生の人数の多さ、そして彼等の研究能力や日本語能力および英語能力の高さに驚いています。私は名古屋大学で会話分析を専門とする林誠教授に受け入れていただき客員研究員をしています。林教授の研究室に所属する大学院生および研究生のうち約7割は中国人留学生と韓国人留学生です。

セミナーや研究会に毎回提供される相互行為データは日本語または英語で、彼らにとっては外国語です。それにもかかわらず、日本語や英語の会話の分析に果敢に取り組み、自らの見解を述べている彼らを見ると、自分が米国の大学院における研究会で英語の会話データを分析しようと奮闘していたことを思い出します。私の場合は第二言語である英語の会話分析に取り組んでいただけでしたが、彼らは日本語と英語という2つの外国語のデータを考察しなければならないわけですから、私よりも数倍大変なはずです。おそらく彼ら

は授業外でも会話分析の勉強だけでなく、日本語や英語といった語学の勉強にもかなりの時間を費やしているのでしょう。そんな留学生たちを見ると、また私も初心に戻って努力して学び続けることの大切さを自分自身に言い聞かせることができます。

国内研究期間もあっという間に残りあと5か月となってしまうましたが、残された時間を有効に使い、地道に努力して研究に取り組んでいきたいと思います。

— ◆ 2021年度共同研究グループ 経過報告 ◆ —

音声研究と音声教育

小松 雅彦 / 相原 昌彦

言語教育において音声教育の重要性が徐々に認識されてきている。本研究グループでは、幅広く音声とその教育についての研究を行っている。言語研究センター共同研究の期間は通常最長3年であるが、新型コロナウイルスの影響で研究の遅れがあったことが配慮されて4年目となる本年度まで延長することが認められた。

昨年度は、学生と共同で音の印象についての3つのトピックの研究に着手した。本年度は、そのうちの1つである動物の鳴き声と擬声語の関係について、卒業した学生から引き継いで研究を行っている。現在のところ、昨年度準備した14種の動物の鳴き声の音声素片について20名に対する聴き取り調査が終了し、今後分析を行う予定である。調査はアイアール・アルト社に依頼して行っ

た。本研究の成果が未公開であるため詳細の報告はここでは控える。

音の持つ印象についての研究は、マーケティングの領域では注目されているが、言語学・音声学の領域ではまだまだ数が少ない。特に、擬声語・擬音語は、人間による音の知覚・認知プロセスを反映しつつ、他の語彙層とは異なった擬声語・擬音語特有の音韻論的プロセスに組み込まれたものであり、知覚・認知と言語システムが交わる研究領域である。まだまだ未開拓の研究領域であると考えている。

日韓両言語の学習者の作文にみられる母語干渉の諸相

高木 南欧子／尹 亭仁

日本語教育の観点からは、韓国語母語話者の「助詞」、「アスペクト」の使用について誤用の抽出を書きことばから行い、整理を行ってきているが、2021年度は話しことばと対照する作業を加えている。また、母語干渉とみられる項目のいくつかについては、韓国語母語話者の日本語学習におけるフィードバックに反映させる試みを行ってきた。しかし、遠隔授業では効率的に行えないことから、問題に含めた形で提示させることを検討している。また、特にアスペクトに関しては、どのような状況を意図したアウトプットであったかがテキストだけでは不明であることが分かったため、将来的に聞き取り調査を行うことを検討している。

韓国語においては、2021年度前期に作文の課

題を集めることが容易ではなかった。後期になってから中級と上級のクラスを中心に毎週作文を集めている。今年度も昨年度に続き、中級以上のクラスで、助詞ニ・カラ・デ・ノの誤用例を取り上げ、注意喚起に努めている。カラの場合、対応する韓国語の助詞が共起する名詞(句)の意味によって8種類(에서/에서부터/부터/(으)로/(으)로부터/에게서/한테서/께)もあるため、干渉が頻出している。アスペクトについては、補助動詞「一ている」「一てしまう」に対応する韓国語の複数の補助動詞の用法について具体例とともに取り上げている。アスペクトにおいても助詞の誤用と同様に母語干渉を防ぐための有効な提示が今後の課題である。



日本人学習者のためのロシア語学習語彙の研究

堤 正典／小林 潔

本研究ではロシア語の学習語彙を扱った。二つの点を中心に研究を行った、ひとつは学習語彙リストの検討であり、もうひとつは学習語彙の多義語分析である。

ロシア語学習をまったくの初修から始めるとすると、どのような語彙を学習していくべきかについては、学習すべき文法項目との関係も考慮して吟味する必要があるのは当然であるが、それとともに学習者がどのような表現を学ぶべきかについ

ては語彙と直接かかわると言ってもよい。日本人学習者を想定した場合、どのような表現を覚えていくべきかについて十分な調査が行われているとは言えない。そこで、我々はТРКИの語彙リストを土台に、付け加える語、場合によっては削除する語を検討している。ТРКИの語彙リストはロシアへ留学してロシア語を勉強する学習者を想定している。ロシアに暮らしながら、ロシアの環境や常識の中でロシア語を使うことを想定しているわけ

である。ロシア語学習者は必ずしもそのような人
たちばかりではない。そのようなことをふまえた
再検討が必要なのである。

学習語彙リストの再検討とともに、語彙の多義
語分析を行った。語は多くが多義語である。辞書
のそれぞれの語彙項目の語釈がひとつだけのもの
が少ないので、このことは明白である。語は多義
ネットワークを形成している。初学者が語を学習
する際に、多義のうちのどの意味をまず覚えるべ
きなのかは必要な検討事項である。そして、その
語の訳として与えられる日本語も多義である。ロ
シア語とそれに対応する日本語でそれぞれが多義
であるため、ロシア語で意味することと日本語で
意味することが異なる場合が当然ありうる。日本
語とロシア語の双方の多義ネットワークを対照し

た分析は、学習者にも有用であるとともに、教師
にも必要な情報である。

我々の研究では上記のことを進めてきた。国を
越える移動ができないので、予定していたロシア
人研究者の協力が得にくい状況が続いており、研
究の進捗は満足なものとは言い難い。そのような
中で、堤が講師を務め、2021年4月～9月に
NHK（ラジオ第2放送）で放送された「まいにち
ロシア語・入門編」（全72課）は、本研究の成果
を取り入れた学習内容となっている。また、小林
は語彙研究として、日本におけるロシア人がかか
わるニュースを題材に、それがロシア語で表現さ
れた時と日本語で表現された時でそれぞれの対応
する語の意味範囲の違いからロシア語では不正確
な伝わり方がありうる例を分析し報告した。



法制の対照言語研究：

モーダル、副詞の関わり、言語によるストラテジーの違いを中心として

佐藤 裕美／ラブリー，エスター／チック，ソニア

本研究グループは2021年9月初旬になって
ようやく研究助成決定の通知を受け、活動の開始
からまだ日が浅いグループです。生成文法理論、
応用文化言語学、選択体系機能言語学と異なる研
究のバックグラウンドをもつメンバーが融合的に
コンテキストの中での言語の形式と意味の関係を
捉えようとクループを結成しました。世界各国の
リーダーたちがコロナウィルスによるパンデミッ
クの中で共通するテーマ、課題について多くの
メッセージを発しており、共通点の多いコンテク
ストの中で異なる言語のメッセージの表し方の違

いに関心を持ったことが契機となりグループでの
比較言語学的研究を行っています。現在は、日本、
中国、オーストラリア、英国のリーダーたちのス
ピーチ、記者会見での発言を比較するためのデー
タ整理と分析をおこない、毎月の例会で報告して
います。次年度はこれまで蓄積したデータを基に
ある程度の成果発表ができると思います。

『良友』画報と言語—身体の言説を中心に

孫 安石／村井 寛志／鈴木 陽一

『良友』画報を取り上げた本共同研究は、2017年に言語研究センターの出版助成を受け、孫安石・菊池敏夫・中村みどり編『上海モダン「良友」画報の世界』（勉誠出版、2018年）を上梓することができた。その後、『良友』画報と言語—身体の言説を中心に」（2021年度～2023年度）という新しいテーマで研究をスタートした。しかし、コロナ禍の影響でほとんど研究活動を展開することはできず、以下、『良友』画報と上海に関連する関連記事を発表できたことに留まっている。

- （１）英国の Science Impact 社の雑誌「Impact」（2021年2月号）「Critical Thinking in Social Sciences」特集号に「How Europe, the US and Asia impacted each other's society」（Professor An-suk Son 孫安石）

- （２）孫安石「腺ペスト対策—ネズミを捕れ、ペ

ストを防げ、猫を飼え—1909年の『上海租界工部局公報』（『中国研究月報』2021年5月号、No.879）

- （３）また、京都大学教育学部にて実施された集中講義（2021年8月10日～13日）において、『良友』画報の資料と孫安石他編『上海モダン「良友」画報の世界』についてその内容を口頭紹介した。

- （４）神奈川大学言語研究センター NL、No.47号（2021年2月予定）に連載記事『良友』画報の研究とその周辺の話—『近代電影氏研究資料彙編』の解題を兼ねて（３）』を引き続き、掲載する予定である。

その他、すべての共同研究の活動記録は、研究会 HP の <http://liangyou.jugem.jp/> に内容を一般公開している。（文責 孫安石）



日本語教師の「養成修了段階」における授業実践能力の分析

富谷 玲子／門馬 真帆

神奈川大学日本語教員養成課程では国内外に数多くの優秀な日本語教員を輩出している。優秀な日本語教員であっても、卒業直後のキャリアスタート時には大きな困難を抱え、それぞれの教育環境の中で独力で困難を克服していったということが課程修了者から報告されている。キャリアスタート時の困難は日本語教師にとって、「通過儀礼」ともいえるものであり、その困難は本学の養

成課程の精度のみに起因するものではなく、そのように考えることは日本語教師教育の大きな問題の矮小化につながる。

養成段階では「日本語」という言語の仕組み、外国語教育の方法論、日本語教育を取り巻く世界情勢などの知識を獲得させ、さらに日本語教育実習を通して日本語教育現場での実践を体験させることが目標とされる。一方、日本語教師としてキャ

リアスタートする際には、たとえ初心者であっても、教室活動に必要な十分な教授能力が期待される。養成修了段階の目標達成とキャリアスタート時の必要十分条件の間にこのようなギャップがあることは広く知られているが、そのギャップを乗り越えるのは「初任日本語教師」の個人的努力に任されていた。

現在、このギャップを埋める方策が模索されている。もちろん、日本語教師を雇用する日本語教育機関での初任者研修の開発と実施が必要不可欠ではあるが、養成課程においても教育実践能力のために教育内容の充実をはかることが可能なのではないかと考えた。本研究は、後者の実現のため

の基礎研究である。

2021年度は、初任者がどのような困難に直面し、どのようにしてそれを克服していったのかについて、中堅日本語教師を対象として実施して調査結果の分析を行った。また、調査技法に関する検討を行った。

本研究は3年計画である。2022年度・2023年度は、上記調査の手法を確立し、調査を実施し、得られたデータを分析する予定である。さらに、学内の現在の日本語教員養成課程の教育内容について精査し、養成課程修了段階で習得すべき日本語教育の実践能力の水準について具体的に記述することを目指す。

— ◆◆ 2021年度共同研究グループ 成果報告 ◆◆ —

『良友』画報と上海の美術分野を中心に（2018年度～2020年度）

孫 安石／村井 寛志／鈴木 陽一

『良友』画報を取り上げた本共同研究は、2017年度に言語研究センターの出版助成を受け、孫安石・菊池敏夫・中村みどり編『上海モダン『良友』画報の世界』（勉誠出版、2018年3月）を上梓し、2018年からは『『良友』画報と上海の美術分野を中心に』というテーマで新たな研究をスタートした。すべての共同研究の活動記録は、研究会HPの<http://liangyou.jugem.jp/>に内容を一般公開しているが、以下、主だったものを記す。

（1）『上海モダン『良友』画報の世界』合評会 （6月9日）の実施

日時：2018年6月9日（土曜）

場所：神奈川大学・横浜キャンパス20号館212室

内容：（1）『上海モダン「良友」画報の世界』合評会

- 1 文学の視点から（鈴木 将久、東京大学文学部）
- 2 地図と場所への視点から（木之内誠、首都大学東京）
- 3 テーマを限定せず、感想をいくつか（邵迎建、東洋文庫研究員）

（2）資料・研究会の紹介記事

◎上海租界工部局 董事会会議録 1854～1943年
The Minutes of the Shanghai Municipal Council.
From Shanghai Classics Publishing House and Shanghai Municipal Archives. Contents: 14,758 pages. 上海工部局の方針決定組織であった董事会の1854年7月から1943年12月まで会議録。議

題は、公衆衛生、交通、通信、郵便、租税、都市計画、ガス供給、街路照明、人力車夫の管理、動物保護、警察等、多岐にわたる。1854年7月から1906年12月までは手書きで、それ以降はタイプ文書。89年間におよぶこの会議録は、湾岸の小都市から中国の商業中心地へと変化を遂げた上海はもとより、近代国家建設、国共内戦、日中戦争といった中国の激動の歴史をも反映する資料となっている。

◎上海租界工部局公報

Shanghai Municipal Council: The Municipal Gazette, 1908-1940. From Shanghai Library. Contents: 14,824 images. 上海共同租界の日常問題やインフラを管理した西洋人によって1854年に組織された上海工部局(Shanghai Municipal Council)は、1880年代半ばには都市の商業を実質独占するようになり、ガス、電気、水道等を管理し、さらにはアヘン販売も規制した。Municipal Gazetteは、公式機関紙として1908年から1940年まで刊行された。毎週金曜日に発行され、通知、各部門の報告、読者からの手紙、議事録、予算、歳入の月間集計、収入と支出の決算書などが掲載されている。

◎神奈川大学言語研究センターNL、2019年、No45号に「『良友』画報の研究とその周辺の話ー近代電影氏研究資料彙編の解題を兼ねて(1)」

◎神奈川大学言語研究センターNL、2020年、No46号に「『良友』画報の研究とその周辺の話ー近代電影氏研究資料彙編の解題を兼ねて(2)」

◎英国のScience Impact社の雑誌「Impact」(2021年2月号)「Critical Thinking in Social Sciences」特集号に「How Europe, the US and Asia impacted each other's society」(Professor An-suk Son 孫安石)が掲載された。

(3)「円卓会議ー中国・上海都市研究の新動向」の実施

日時：2018年11月9日(金)・10日(土)

場所：中国・上海社会科学院

共催：神奈川大学非文字資料研究センター・上海社会科学院歴史研究所

《プログラム》(一部)

【報告】

- ①『良友』画報の論文集刊行後の余談ースポーツとKODAK、そしてShanghai Municipal Council 英文資料について(孫安石、神奈川大学非文字資料研究センター研究員)
- ②上海文化と香港・華僑(村井寛志、神奈川大学非文字資料研究センター研究員)
- ③『良友』画報の研究ー百貨店(菊池敏夫、神奈川大学非文字資料研究センター研究員)
- ④都市上海の中の創造社作家たち(中村みどり、早稲田大学商学学術院准教授)
- ⑤中華民国期上海の日本人「戯迷」たち(森平崇文、神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部准教授)
- ⑥「中国料理」はいつ生まれたのかー人民共和国初期の北京と上海(岩間一弘、慶應義塾大学文学部教授)
- ⑦上海のキリスト教ー戦後、そして現在(石川照子、大妻女子大学比較文化学部教授)
- ⑧中華民国期の「漫画」と「キャラクター」(城山拓也、立命館大学言語情報センター外国語嘱託講師)

(4) 書評の掲載

孫安石・菊池敏夫・中村みどり編『上海モダン「良友」画報の世界』(勉誠出版、2018年3月)については、以下の書評が掲載された。

- 1、邵迎建「上海モダン<良友>画報の世界を読む」(日中人文社会科学学会編『知性と創造ー日中学者の思考』第10号、2019年2月)
- 2、白戸健一郎「上海モダンー『良友』画報の世界」(書評、『中国研究月報』、2019年、第73

号No.4)

3、木之内誠「阮玲玉と『良友』の路地裏—上海モダンの「かくれた次元」としての空間性をめぐって」(『人文研究』第197号、2019年3月)

(5) 研究会の開催

その他、神奈川大学非文字資料研究センター租界・居留地班 第65回研究会(7月18日、zoom)との共催として、

1 日時：2020年7月18日(土曜)

場所：zoom会議

「戯単研究の可能性—1950年代上海を例に」森平崇文(立教大学、教授)

2 日時：2020年8月26日(水曜)

場所：zoom会議

「吉田初三郎の鳥瞰図への誘い」劉建輝(国際日本文化研究センター、教授)を開催した。

(文責 孫安石)



言語景觀に関する社会言語学的基礎研究II

尹 亭仁／彭 国躍

中国語関連の研究成果は以下のようにまとめる。

(1) 発表論文：「近代上海言語景觀の生態言語学的類型—ことばの選択、接触とアイデンティティ—」『人文研究 (203)』神奈川大学人文学会2021年。

本論文は、主に生態言語学の視点から近代上海の言語景觀における中国語、英語、ロシア語、ドイツ語、日本語、フランス語を含む多言語接触の実態を記述し、オーナーのアイデンティティの形成プロセスに基づき、それぞれの店舗に現れた言語景觀を3つの類型(言語維持型、言語融合型、言語交替型)に分けて分析した。そして、民族人口学、民族政治学の側面から証拠となる人口統計データを示しながら当時の言語生態に影響を与えた社会的環境因子について考察した。

(2) 資料収集：①上海の外に、広東、杭州、新疆、蘇州、大連、香港などを含む百年前の中国各地の言語景觀の写真資料が収集できた。今後これらの資料を使って、歴史的横断研究を展開することが可能となった。②9～19世紀、つまりカ

メラが発明される以前の中国の都市言語景觀資料を、一部絵画を通して収集することができた。これにより古代中国の言語景觀の研究に関するおおよその見通しが立った。③横浜中華街の形成に関する歴史文献や写真画像の収集を行ってきたが、収集された資料は今後横浜中華街の言語景觀の通時的研究に活かすことができる。(文責：彭国躍)

韓国語関連の研究成果は以下のようにまとめる。

(1) 発表論文：「日本における韓国語の言語景觀と活用の可能性(1)—韓国語の漢語語彙力の向上の観点から—」『神奈川大学言語研究』43号、pp.1-34.

本稿では、数年にわたり東京・横浜をはじめ京都・福岡・熊本・富山・石川などで集めてきた調査資料を、とりわけ日本語と韓国語の漢語の対応に注目し、分類・分析を行なった。1千枚以上の資料から、〈図1〉と〈図2〉のように日韓両言語で対応している漢語を生かす取組みを提示、その有効性について論じた。

投稿中の「日本語母語話者に韓国語の2字漢語



図1 精算機：정산기（横浜駅）



図2 国内線：국내선（福岡空港）

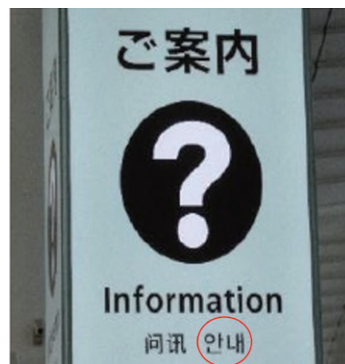
動詞を体系的に提示するための取組みについて」では、韓国語の2字漢語動詞の体系的習得に言語景観が1つの教材として役立つことを論じた。漢語は両言語の語彙において約半分を占めているため、量が膨大である。漢語動詞に焦点を絞った場合、漢語動名詞に接続する「する」がタグとして機能するため、見つけやすい、まとめやすいという利点がある。両言語には共通する漢語が多いため、応用がしやすいことにも触れた。

（2）本学の韓国語共通初級テキストでの活用：<図3>は本学のみなとみらいおよび横浜キャンパスで使用する韓国語初級共通教材の一部である。クラスによっては、このような対応を示す他

の漢語動詞を集めてみるよう課題を出し、学習者の実践と教育的効果を試みている。

（3）今後の課題：①今まで集めた言語景観資料に追加調査および韓国での関連する資料を加え、韓国語の文法の理解力の向上について論文にまとめる予定である。②日本の言語景観にみる韓国語の表記上の不一致、動詞の活用形の誤用、外来語のずれなど様々な問題についても論文に反映していく。③日本での言語景観の資料に、ソウル、北京、台北での調査資料をまとめ、「漢字文化圏の言語景観の比較」も試みたい。

（文責：尹亭仁）



【 전부 하네다공항에서 촬영(撮影) 】

図3 みなとみらいおよび横浜キャンパスの韓国語初級Ⅱa・Ⅱb共通教材より

多読事始め

講師：小林めぐみ先生（成蹊大学 経営学部教授）
草薙 優加先生（鶴見大学 文学部教授）
深谷 素子先生（鶴見大学 文学部准教授）

本年度の言語研究センター主催定例講演会は、2022年1月19日の15時20分より本学4時限の時間帯にZoomを用いたオンライン会議形式で開催されました。講師には、成蹊大学と鶴見大学より語学教育において多読書の利用による教授法を実践されている先生方をお招き致しました。3人の講師の先生方は多読に基づく教授法について共同プロジェクトを行うなど、国内外を通じて大変精力的に活躍されています。今回の講演会は、協同研究等を通じて以前から講師の先生方とお知り合いである、経営学部の河内智子先生のご紹介がきっかけとなり実現いたしました。

講演は、講師の先生方が、テンポ良く代わる代わる「多読」について興味深い情報を提供し、最後に質疑応答を行うという流れで進められました。多読（extensive reading）とは、外国語の学習者が、辞書や参考書を用いながらではなく、自分のレベルに合った簡単な読み物を大量に読む学習方法であること、文章を一文ずつ正確に、文法事項を理解しながら訳読したり精読したりするのとは異なり、自分で面白そうと思う読み物を選び楽しく読んでいくことにより、少しずつ早くより多く読めるようになり、より理解がふかまり、より楽しくなるのでもっと読みたくなるという、自立学習のサイクルが生まれることが期待できる学習方法であることが説明されました。

実際の多読に用いられる学習教材の例も紹介さ

れ、学習者のレベルに応じた、初歩的なものから、母語話者用の書物と同等の高度な教材まで、きれいな挿絵や図表が多く含まれ視覚的にも魅力的で手に取ってみたいくなるような多様な教材が紹介されました。学習者は、読んだ本の内容について後に試験があるというような精神的な負担を感じることなく、純粹に楽しみを追求して読むことが基本であり、外国語による自立的な読書習慣を身につけられることが、一番の利点です。

多読を語学の授業に取り入れる効果的な方法についての紹介もありました。自己の進歩を具体的に把握し目標設定や振り返りが可能となるように読書記録を付けること、読書記録の個別指導における有効活用、同じ本の内容について語りあったり、各自の読んだ本を他の学習者に紹介したりするためのクラスコミュニティの活用など、学習者の挫折を防ぎながら読書習慣を育成する工夫が多く紹介されました。実際に授業で本の紹介を行った学習者が、自分の読んだ本の面白さを伝えるために様々な工夫をこらしたこと、他の学習者の準備した見やすいスライドや説得力のある説明に刺激を受け、また他の学習者たちに本の紹介をするという行為自体を非常に新鮮に感じて積極的に取り組んだことなど、多読を通じた活動が授業を活性化した実例もご報告頂きました。更に、読後の創造的なアクティビティーとして、品詞や語数を規定したフォーマットで本の内容をまとめた

5行詩を作り自分でデザインしたカードに書き込む、ユニークなアクティビティーも紹介されました。

講師の方々が強調された重要な点の一つは、「多読」の有効性を紹介して促進することは、決して「訳読」、「精読」や他の教授法、学習方法を否定したり、それらより効果的なものであると主張したりすることではなく、あくまでも相互補完的な方法として、または新たに授業活動等に取り入れるものとして紹介するということでした。いかなる教授法を用いるにせよ、限られた授業時間内で行いうる語学教育の限界を意識すれば、学習者が自立学習の習慣を身につけることこそが重要なわけですが、自分の興味で外国語の本を手に取り、純粹に楽しみのためだけに読んでみるという体験

は、どの学習者にも一度は味わう機会を提供する価値が十分あると感じながら、講演を拝聴いたしました。

多忙な年度末であり、本学における補講日を利用した開催ということもあり、講師の先生方は勿論ですが、言語研究センター所員の方々、事務局の方々に多大なご協力を頂きましたことに、お礼申し上げます。語学教育に関わる先生方を中心に多くの方々にご出席頂き、また数は少なかったようですが学生の参加者からも、「多読」の実践方法に関する質問が出るなど、とても有意義な講演会となりましたことに、心より感謝致します。

(文責 大橋哲)



神奈川大学言語研究センター主催
2021年度 講演会

「多読事始め」

講師：小林 めぐみ 先生
(成蹊大学 経営学部教授)
草薺 優加 先生
(鶴見大学 文学部教授)
深谷 素子 先生
(鶴見大学 文学部准教授)

日 時：2022年1月19日(水) 15:20～17:00

開催方法：ZOOM開催

お申込み：参加希望者は1月17日(月)までに氏名と所属を明記し、

下記連絡先までメールをお送りください。

追って参加ZOOM IDとパスワードをお知らせいたします。

連絡先：言語研究センター

(gengo-koenkai@kanagawa-u.ac.jp)

【 新入所員紹介 】

経営学部国際経営学科 特任助教

佐藤 梓

専門は日本語教育及び外国語学習における動機づけ研究です。これまで、国内外の大学などで日本語教育に携わってきました。特に海外での経験が、現在の研究をはじめのきっかけになりました。海外で日本語を教える中で、大学の卒業単位などとは関係なく、また、就職でも優位なわけでもないにも関わらず、とても熱心に学ぶ学習者を目にしてきました。そのような学習者が日本語を学び続ける理由や学習を駆動しているものに対し関心を持ちました。

これまで調査対象としてきたのはメキシコの大学で日本語を学ぶ学習者です。日本語を学び始めたきっかけを尋ねると、子どものころに見たアニメや日系企業などから、日本語を身近に感じていたことなどが挙げられますが、それはあくまでもきっかけにすぎませんでした。調査を進めていく中で、対象者にとって日本語を学ぶことの「おもしろさ」とは何か注目するようになり、他の言語ではなくなぜ日本語を学び続けるのかという観点から動機づけ研究を行ってきました。

また、日本語を教え始めた当初は、今ほどインターネットが手軽ではなく、日本語使用者とつながることはそれほど容易ではありませんでした。そのため、インターネットを使って日本語を使う場を提供することやインターネットを介して日本語を使うことは学習者にとってどのような意味があるかなどを考えてきました。

今後は、来日する留学生の日本語学習継続を支えている事柄を深く考察し、学習動機との関連や学習者がインターネットをどのように学習に活用しているかなどについて検討していきたいと思っています。

理学部情報科学科 准教授

Antoine Bossard ボサル アントワヌ

First and foremost, I would like to thank the Centre for language studies for having me as a member. My field of expertise is computer science, and my research is focused on two main subjects: graph theory, especially applied to routing problems in the interconnection network of supercomputers, and information representation on computer systems, especially applied to Chinese characters. It is interesting to note that these two areas are not unrelated: it is indeed insightful to consider relations between Chinese characters, and logograms in general. Hence, for example, logograms become vertices of a graph and relations between the corresponding characters, such as semantic and phonetic relations, are expressed with graph edges.

More concretely, I have been researching and proposing encoding methods for computer systems, codes which were designed to theoretically support the entirety of Japanese characters, and that although the elements of such a character set may not be completely known. Refer, for instance, to the Unrestricted Character Encoding for Japanese (UCEJ) which we have introduced to this end. For comparison, conventional encoding approaches (e.g. Shift-JIS, Unicode) support only a limited set of characters, notoriously leaving infrequent ones such as the Japanese *kokuji* out.

Simply stated, from an application point of view, these researches are aimed at improving the processing of these characters by computer systems, for which, as briefly mentioned previously, there is still room for amelioration.

Besides, these researches have led me to work on the XIXth century *Dictionarium anamitico-latinum* by Jean-Louis Taberd which is one well-known reference for the ancient Annamese writing system based on the *chũ nôm* characters (themselves reusing, or derived from Chinese characters). This research has notably been partly supported by the Centre for language studies.

À bientôt.